

数字の小道

⑤ 国際交流・協力を活躍するウチナンチュ

総務部調査企画課

・青年海外協力隊の合格者、沖縄トップ!?

JICA(ジャICA)や青年海外協力隊を存じでしょうか。

JICAは独立行政法人国際協力機構(Japan International Cooperation Agency)の略称で

開発途上国の国造りと人々の生活向上を支援する政府関係機関です。JICA沖縄国際センター(JICA沖縄)では、開

発途上国の行政官や技術者を対象に、IT、自然環境保全、保健医療などの分野で技術研修

を行っている他、JICAボランティアの募集広報に係る事業などを行っています。

青年海外協力隊は、開発途上国へ派遣されるJICAボランティアの二つです。シニア海外ボランティアなども含めた

JICAボランティア全体の合計派遣実績では、全国と比して

まだ多いとは言えません。

しかしながら、注目すべきは近年、青年海外協力隊について

県内の応募者数と合格者数が多くなっていることです。平成17

年度においては、その対象年齢人口(20~39歳)あたりの応募者数(全国2位)と合格者数(全

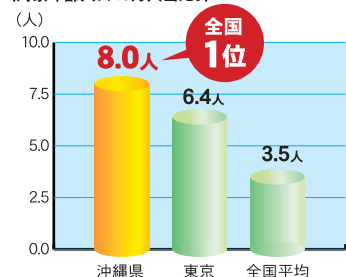
国1位)がトップクラスになっています。(図1)

これは、昔ながらのユイメール精神を引き継いできた県内の若い人々が近年、グローバルな国際感覚や国際意識を持ちはじめ、彼ら

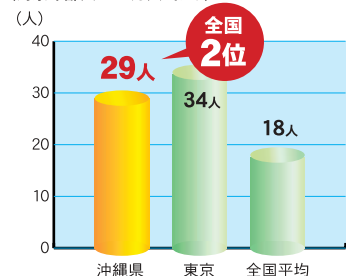
らがもつ知識や技術を国際協力・貢献に生かしたいという気持ちの強い表れなのかもしれま

図-1

青年海外協力隊合格者数
(対象年齢人口10万人当たり)



青年海外協力隊応募者数
(対象年齢人口10万人当たり)



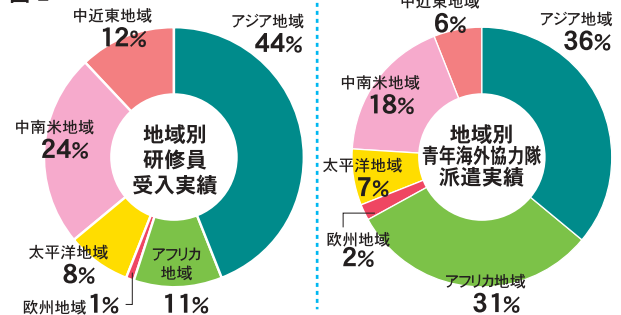
JICAボランティアの概要

事業名	対象年齢	任期
青年海外協力隊	20~39歳	原則2年
日系社会青年ボランティア		
シニア海外ボランティア	40~69歳	原則2年
日系社会シニアボランティア		

・広がる沖縄の人的ネットワーク

JICA沖縄では、58カ国に227名(S43、H17年度)の青年海外協力隊を派遣しており、153カ国6447名(S57、H17年度)の海外研修生を受け入れています。国際協力や国際交流をおしてこれだけの国々と関わりをもち、つながりをもつことができたことは、沖縄にとりて大きな誇りであり、財産といえます。(図2)

図-2



また、記憶に新しいところで先月、世界のウチナンチュ大会が開催されました。4回目を迎

行く人・来る人～双方向からの相乗効果!!

- 元青年海外協力隊
(現在:小学校臨時教諭)
中村貴子さん
- 派遣国:ジャマイカ
(H18.7月帰国)
- 派遣職種:小学校臨時教諭
- 技術研修員
(現在:サモア天然資源環境省職員)
イベッタさん
- 出身国:サモア
- 研修分野:自然環境保全
(琉大大学院理工学研究科)



国際協力・国際貢献を通して
日本人のいない現地で初めて少数派の立場を経験した。当初は私も現地の人も緊張して身構えていたが、接していくにつれ、言葉も通じる同じ人間として受け入れてもらった。
ジャマイカの人々は日本も含め外国のことを驚くほど知らない。しかし、日本に関連したものを見つける度に私に見せに来るなど、私が行ったことで日本に少なからず興味をもってくれたと思う。青年海外協力隊に参加したことをきっかけに自分の家族もジャマイカについて知るようになった。

海外から見た沖縄のもつ魅力や可能性
沖縄の人は他の都道府県に比べ、帰属意識が高く、「沖縄人」としてのアイデンティティを強く持っている。県外や海外でもエイサーや三線を披露するなど、自分たちの文化を発信する能力に優れていると感じる。
地域社会での助け合い意識が強い開発途上国は、ユイマール精神を大切にしてきた沖縄に通じるところがあり、沖縄の人々にとってはなじみやすい面もあると思う。

海外での研修を通して
技術研修員受入事業は、開発途上国の当事者が自国の問題解決に役立つ知識や技術を得得る貴重な機会であり、大きな意味がある。研修の講師と帰国後も、電子メール等を通じて技術的な相談をすることができ、また、世界各国から参加している他の JICA 研修員や大学の留学生との交流を通じて世界中に人的ネットワークを築くことができた。

沖縄の印象
以前に沖縄で環境分野の研修を受けた友人から、非常によかったと聞いていた。
サモアでも太平洋島サミットの関係で沖縄のことは知られている。人々はとても友好的であり、言葉が通じなくても居心地がよいように気を配ってくれるなどのホスピタリティを感じる。また、特異な文化や伝統をもち、観光客等の世界の人々を引きつける魅力がある。



JICAボランティア:バングラデシュの教え子達と

えた今大会は、海外から過去最多の4393人が参加し、移住世代の功績を踏まえ、ウチナーネットワークを担う次世代の育成を図り、世界に広がるウチナーネットワークの継承さらには深化・拡充を目指したものであり、大盛況のうちに幕を閉じました。

現在、世界各国で活躍するウチナンチュは36万人といわれて

います。沖縄県の推計によると、在外日系人に占める沖縄県系人数の割合は約12%となっており、一地域のアイデンティティを有する人々が世界に雄飛し活躍していることは、他地域では類をみないものとなっています。

・**沖縄が国際化を目指すにあたって**
ヒトとヒトとのつながりをどう生かす??

今日の世界は経済、文化などの様々な分野でグローバル化、ボイダレス化が進展し、地域間、諸国間の相互依存が高まっています。

現在、内閣府においては、沖縄振興計画に基づき、沖縄県の自立に向けて施策を展開しています。本計画の中で、沖縄の歴史的、地理的特性を踏まえ、わが国だけでなくアジア・太平洋地域の社会経済及び文化の発展に寄与する地域の形成を目指すとして、施策の大きな柱に位置付け、沖縄県の国際交流拠点の形成に向けて取り組んでいるところです。

沖縄県の国際交流行政は、世界のウチナンチュ大会の実施等

に興味をもち、理解を深めることにもつながっているという意見も聞かれました(インタビュー参照)。

彼らが伝道師となって沖縄を紹介し、アピールしていく効果、また、ウチナーネットワークを有効に活用していくことは、経済や文化等

でみられるように、世界で活躍する沖縄県系人いわゆる「世界のウチナンチュ」を活用していくことが他府県とは違うユニークな展開を見せています。

また、青年海外協力隊の派遣や技術研修員の受入等に代表される国際協力等は、開発途上国の人々と沖縄の人々が互に行き来することで、知識や技術の交換の機会としてだけでなく、お互いの国

の各分野における人的・物的交流の促進につながる大きなポテンシャルを秘めています。今後、沖縄県が国際交流拠点を目指し、さらなる発展を成し遂げる上で、ネットワークの強化や国際協力をおとした人的交流の継続は、確かな近道となっており、その実現に向けて着実に歩み進んでいると実感しています。

(調査企画課/石川正之)

世界のウチナンチュ分布図

